

# バードリサーチ ニュース

2006年9月号 Vol.3 No.9

2006. 9.13.

Photo by Kikuchi Takeshi

## 参加型調査

### 季節前線ウォッチ

秋の調査にご協力ください！

植田 睦之

まだまだ暑い日が続きますが、朝晩は涼しくなってきました。そのような変化を感じてか、すでに鳥たちには秋が来ているようです。熊本では早くも8月20日にモズの高鳴きが聞かれ、9月に入ってから鹿児島や宮崎、山口などの西日本地域だけでなく、関西、北陸、関東、そして北海道からも高鳴きの情報が届きました。



モズ  
[Photoby 長嶋宏之]

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/kisetsu/kisetsu2006.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kisetsu/kisetsu2006.html)

今秋も昨年に引き続き、季節前線ウォッチを行ないます。秋の対象種はモズ、ジョウビタキ、そしてツグミです。昨年の結果では、モズは標高の高いところの方が高鳴きが早い傾向があったものの、北からあるいは南から早く始まるなどの地理的な傾向はみられませんでした。ジョウビタキやツグミについては北あるいは日本海側で早く記録されるという傾向がありました。今年も同様の結果になるのでしょうか？



ジョウビタキ [Photo by 谷英雄]

モズについてはすでに高鳴きを聞かれた方もいらっしゃると思いますし、ジョウビタキはもうしばらくすると見られるようになると思います。これらの鳥をご覧になられた方は、ぜひ情報をお寄せください。対象種の姿や鳴き声は、下記ホームページでご覧になれます。

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/index\\_kisetsu\\_taisho.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_kisetsu_taisho.html)

調査結果は下記のホームページあるいはWEBサービスの「身近な野鳥調査」の「季節前線ウォッチ」からも送信することができます。ご協力、よろしくお願いたします。

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/index\\_kisetsu\\_chosakekka.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_kisetsu_chosakekka.html)

WEBサービスはこちら

<http://sys.act-field.co.jp/index.htm>

### ミヤマガラス

初認調査2年目にご協力ください！

高木 憲太郎

あっという間に1年が経ってしまいました。もう9月、過去の文献などを見ていると、早ければ今月中にミヤマガラスが日本のどこかに渡ってきます。

バードリサーチでは今年も去年に引き続いてミヤマガラスの初認時期の調査を行います。もし、みなさんがバードウォッチングや調査などで水田や畑などに出かけた時は、ガラスの群に目をやってください。ひょっとしたら、ミヤマガラスかもしれません。そして、ミヤマガラスだった時は、観察した場所、日付、羽数などをバードリサーチにお知らせください。初認記録の送付は下記のページからお願いします。

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/index\\_miyamagarasu\\_shonin.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_miyamagarasu_shonin.html)



北へ渡る直前のミヤマガラスの群。出雲にて3月に撮影。

去年の最初の初認は福岡県の10月4日でした。はたして、今年最初の初認はどこから、いつ届くでしょうか？皆さんも、ぜひ参加してください。調査結果は随時ホームページでお知らせします。

この調査は、初認日の地域的な違いから、ミヤマガラスの渡りルートなどを調べることを目的としています。去年は、九州地方、東北地方、中国地方という順番に初認日の情報が届き、朝鮮半島経由以外にも東北に北から渡ってくるルートがある可能性が見えてきました。今年も、去年と同じ結果が得られるのでしょうか？

調査の概要はこちら

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/index\\_miyamagarasu.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_miyamagarasu.html)

去年の調査結果はこちら

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/index\\_miyamagarasu\\_shoninkekka.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_miyamagarasu_shoninkekka.html)

レポート

ツバメは集団ねぐらをどこに作るのか？

神山 和夫 バードリサーチ嘱託研究員/  
ツバメかんさつ全国ネットワーク事務局

7月から8月にかけて、夕暮れ時にツバメが集団でねぐら入りする光景が見られます。場所により数百羽から数万羽ものツバメが、日が暮れる30分ほど前にねぐら上空にやってきて、蚊柱のように群れながら旋回する光景は圧巻です。しかし、一時のことなので、近くに住んでいてもツバメねぐらに気づかない人が多いようです。

1. これまでに行われた調査

これまでに、ツバメの集団ねぐらがどこに形成されているかを調べる全国調査が2回行われています。ひとつは1982～1984年に日本野鳥の会遠江支部が行ったアンケート調査、そしてふたつめは1991～1992年に行われた環境省の第4回自然環境保全基礎調査です。これらの調査から、集団ねぐら形成の傾向として、「新潟県と福島県を結ぶ線よりも南に多い」こと、「太平洋、瀬戸内海、九州北西部の沿岸に多い」こと、「環境別ではヨシ原に見つかる例が圧倒的に多いが、低木林、セイタカアワダチソウ、トウモロコシ畑でもねぐらをとることもある」ことなどが分かっています。

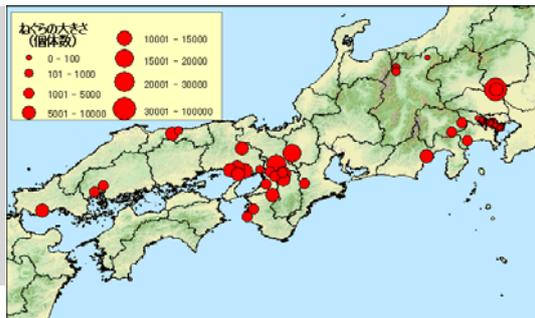
ねぐらの環境	%
ヨシ原	91.6
低木林	7.2
セイタカアワダチソウ	3.6
トウモロコシ畑	2.4
雑草	2.4
松林	1.2
水田	1.2
砂地	1.2

表1. ツバメのねぐらの環境。日本野鳥の会遠江支部1986より。

2. マイクロソフト支援によるねぐら情報収集

また、組織的な全国調査以外にも、ツバメの集団ねぐらの魅力に惹かれて観察を続けている皆さんが各地におられます。このような観察で得られた記録を集約して、近年の全国的なツバメねぐらの傾向を調べるため、バードリサーチではマイクロソフトNPO支援プログラムの助成を受けてWebを使った集団ねぐら情報登録のための地図システムを開発し、今年の7月からツバメ観察全国ネットワークのホームページ(<http://www.tsubame-map.jp>)でねぐら情報の提供を呼びかけてきました。その結果、多摩川流域ツバメ集団ねぐら調査連絡会や、近畿のツバメねぐら調査(日本野鳥の会近畿ブロック主催)、そして多くの個人参加者の皆さんから、9月初めまでに延べ65回(59カ所)のねぐらの情報を寄せていただきました。ねぐらが作られる環境は

図1. ツバメ観察全国ネットワークに届いたツバメのねぐらの位置と個体数。



予想通りヨシ原が多かったのですが、ヨシ原以外にもねぐらがあるという情報が寄せられたので、ご紹介します。

● 街路樹のねぐら

中央自動車道談合坂SA登り方面(山梨県)でケヤキに2000羽、阪急電鉄仁川駅前(兵庫県)のケヤキに194羽のねぐらが見つかりました。ツバメねぐらについて活字になっている記録が少ないため、過去の街路樹ねぐらの記録は不明ですが、私やねぐら観察仲間の人たちが知る限りでは今回はじめて分かったことです。都市部ではヨシ原が少なくなっていますが、そこにいたツバメがどこに行ったのかは分かっていませんでした。私たちが気づいていないだけで、街路樹ねぐらはもっと多いのかも知れません。

● 電線のねぐら

1050羽の電線のねぐら。(広島県廿日市市)。この場所では1996年から電線のねぐらが形成され続けているようです。



写真1. 電線にねぐらをとるツバメ。  
[Photo by 日比野政彦]

● トウモロコシ畑のねぐら

鳥取県倉吉市で8,000羽、兵庫県丹波市で10,000羽がトウモロコシ畑にねぐらをとりました。過去の調査でもトウモロコシ畑やセイタカアワダチソウに大きなねぐらができているので、ヨシ原にねぐらが多いことと合わせて考えると、広くて背丈が高い草地であることがねぐらとして重要なようです。

● ツバメの集団ねぐら調査にご協力ください！

ツバメの集団ねぐらの調査では、個体数のカウントが難しいために正確に記録をとれないことが大きな課題です。しかし集団ねぐらのできる場所や環境については、もっと記録を集めれば解明することができそうです。ツバメねぐら情報の報告フォームは現在もツバメ観察全国ネットワークのホームページで公開していますので、ねぐらを観察された方はぜひお知らせ下さい。



写真2. 多摩川のツバメねぐら。  
[Photo by 渡辺仁]

3. 引用・参考文献

日本野鳥の会遠江支部. 1986. ツバメの罅に関するアンケート調査. Strix 5: 30-46.  
[http://www.wing-wbsj.or.jp/strix/strix005/Strix05\\_04.pdf](http://www.wing-wbsj.or.jp/strix/strix005/Strix05_04.pdf)

環境省. 1994. 動植物分布調査報告書 鳥類の集団繁殖地及び集団ねぐら.  
<http://www.biodic.go.jp/reports/4-03/e113.html>

## 学会情報

### 国際鳥類学会参加報告

2006年8月13日(月)～19日(土)にドイツのハンブルグで開かれた第24回国際鳥学会に参加してきましたので、簡単にご報告をしたいと思います。

学会では毎日、朝8時半から午後6時までスケジュールが詰まっていました。会場は8つの部屋に別れていて、午前中はシンポジウム、午後は口頭発表という構成でした。ポスター発表者は決められた時間にポスターの前に立っていて、興味を持ってやってくるお客さん相手にその都度発表内容の解説をします。ポスター会場ではコーヒーサービスが行なわれていたので、皆コーヒーを飲みながら語り合っていて、日本の学会よりも和やかな雰囲気でした。帰りの飛行機でプログラムを見て数えてみたところ、口頭発表の数はおよそ400、ポスターは13セクションで566個もあったようです。

口頭発表で一番目立ったのは、保全関係で、habitat conservation(生息環境の保全)、population decline(個体群の減少)、threatened species(絶滅危惧種)などのキーワードがタイトルに含まれているものだけでも65個もあり、全体の16%を占めていました。

ここ10年くらいの間、西欧で話題になっていた農地の鳥の減少についての発表はなりを潜め、代わりに今回は都市におけるイエスズメの現状についてのシンポジウムがありました。イエスズメは、日本におけるスズメと同じ生態的ニッチを占めているので、その動向に興味を持っていました。バードリサーチニュースの中でも何度か触れられてきた話題なので、その内容を紹介したいと思います。



開会セレモニー。 [Photo by 齋藤武馬]

### ● イエスズメの減少

まず、ベルギーの J.D. Laet さんが、英国のスズメの大家 J.D. Summers-Smith さんに代わって都市におけるイエスズメについて全体像を説明されました。Summers-Smithさんはすでに80歳を越え、参加はままならないということで欠席されましたが、代わりにビデオのメッセージが会場に映されました。「自分がスズメ類の研究を始めた頃は、誰もイエスズメなど見向きもしなかった。このように国際鳥学会でシンポジウムを開いてくれるようになったことはうれしい。しかし、イエスズメが減少していることは大変寂しく感じている。多くの人に参加してもらい、一緒に考えていきたい」。

都市のイエスズメは、移動手段が家畜から自動車に転換した際に一度大きな減少を経験しています。これは馬が街中のどこでも歩いていて、その飼料からこぼれた種子や、糞に含まれた未消化種子などの食物が豊富にあったものが、自動車の時代になってこうした「おこぼれ」に預かることができなくなったことが原因だろうと考えられています。

ドイツでは、伝統的に“Sparrow club”というスズメを対象としたハンティングの集まりがあり、駆除対象になっていま

た。その理由は、農業害鳥であるほかに、昼日中から外でおおっぴらに交尾するので、不道德の象徴だったからだそうです。“Sparrow club”が駆除を積極的にしなくなったのは、1980年の初頭のことで、その頃にはイエスズメは減少し、駆除する必要がなくなっていました。その他の国でもイエスズメが減少しているところがあるのですが、ヨーロッパ全体で減少しているかというそうではなく、中には減少していない都市もあるという前振りがあり、その原因についていくつかの講演がありました。



イエスズメ [Photo by 谷英雄]

### 実験的研究:

K. Vincent さんは、繁殖に及ぼす昆虫の数の影響を実験的に調べました。調査は繁殖期に巣箱でヒナの成長と付近のアブラムシの数を調べて比較するという方法です。その結果、アブラムシの数が少ないなわばりでは、ヒナの成長が悪く、アブラムシの代わりにアリや植物質のものを与えられたヒナは体重が軽く、巢内で餓死する割合が高いということがわかりました。環境ごとに巣立ちヒナ数を比較すると、市街地では1.89羽、郊外で2.38羽、全英平均で2.6羽となっていて、市街地では個体群の減少が起きてもおかしくない値だということでした。

### 羽の成長帯による健康状態の調査:

L. Vangestel さんは、羽に見られる成長帯(growth bar)が都市では郊外や田舎と比べて狭い傾向があることを見つけ、繁殖期にストレス(例えば、餌不足など)がかかっている可能性があるという指摘をされていました。この成長帯を使う方法ならば、博物館などの標本も使って、健康状態についての時空間的な比較ができそうです。

### 捕食者による影響:

イギリスでは最近、ハイタカの復活と人里への進出がイエスズメの減少に寄与しているのではないかという議論があり、D. Chamberlain さんは捕食者の影響について研究をしました。イエスズメは、リスに対して積極的に避ける傾向を示しましたが、ハイタカやカラス類には明らかな反応を示しませんでした。このことから、ハイタカやカラス類による影響はあまり大きくないのではないかという発表でした。

結局のところ、イエスズメ減少の原因は、一つに絞られていません。餌不足、営巣場所不足、病気、競争など複数の可能性が考えられていて、いずれの原因も単独では現在の状況を十分に説明できないようでした。しかし、原因解明の努力が広範囲で詳細に行われている点が日本と異なる点だと思います。日本でも、ある種の減少が起きた際には、原因解明に向けた資本と人員の集中的な投入が必要だと感じました。

【黒沢令子 北大地球環境科学研究科】



ハンブルグ市役所前広場の黒沢さんとドイツ在住の生態学者A.Davisさん。海外の研究者との交流も国際学会の醍醐味。

# アカコッコ 英: Izu Islands Thrush 学: *Turdus celanops*

## 1. 分類と形態

分類: スズメ目 ツグミ科

全長: 約230 mm 露出嘴峰長: 20~23 mm  
 翼長: ♂118.4mm (112.0-124.0) ♀112.4mm (108.0-117.0)  
 尾長: ♂90.8mm (82.0-100.8) ♀82.5mm (74.0-89.0)  
 ふ蹠長: ♂33.7mm (31.9-35.8) ♀32.9mm (32.5-33.7)  
 体重: ♂78.1g (73.7-81.3) ♀76.1g(65.9-93.1)  
 ※全長は高野(1990)より、露出嘴峰長は清棲(1978)より引用。他は標識調査の際の計測値。

### 羽色:

オスは頭部から胸にかけて黒く、脇腹や腹部は橙色。目の周りとくちばしは黄色。背中、肩羽、雨覆は濃い茶褐色。メスは、雄に比べると幾分淡い。トカラ列島の個体は、伊豆諸島に比べて暗色である。



写真1. アカコッコのオス。 [Photo by 中田一真]

### 鳴き声:

「キュルルル、チョッ」という濁った声で、繁殖期前半には日の出時刻の約30分前の薄暗い時間帯にさえずる。繁殖期後半になると、日中にも鳴く。地鳴きは、「ツイー」、「チャッ、チャッ、チャッ…」という声で鳴く。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

伊豆諸島とトカラ列島に生息する。屋久島、男女群島での観察記録もある。伊豆諸島では、大島から青ヶ島にかけて生息し、北部よりは南部の島で多く見られる。また、冬に静岡県での標識記録があるほか(山階鳥類研究所 1996)、千葉県、三重県、和歌山県などでの記録がある。トカラ列島では、中之島、口之島、悪石島、平島、宝島に生息しているが、伊豆諸島に比べて密度は低い。

### 生息環境:

照葉樹林や夏緑広葉樹林の自然林から二次林までのさまざまな環境で生活する。特に、照葉樹林の低木層があまり発達していない場所では個体数が多い傾向がある(樋口 1992)。アカコッコは、国指定の天然記念物で、環境省レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に選定されているが、火山活動による生息地の減少などの課題を抱えている。

## 3. 生活史



### 繁殖システム:

繁殖期は3月から7月にかけてで、非繁殖期には単独で暮らす。一夫一妻で繁殖し、抱卵はメスが行い、ヒナへの給餌は雌雄で行う。

### 巣:

樹上に細い木の根や草の茎、コケなどを土で固めたお椀状の巣(外径13~16.5cm, 内径8~10cm, 深さ5.5~7cm, 高さ9.5~13cm)を作る。巣の位置は地上から0.5~6mくらいである(清棲 1978)。



写真2. アカコッコの巣と卵。 [Photo by 田中俊比古]

### 卵:

一腹卵数は2~5卵で、3~4卵が多い。卵サイズは長径約29mm, 短径約21mmで、青地に赤褐色の斑点がある。



写真3. アカコッコのヒナ。 [Photo by 田中俊比古]

### 抱卵・育雛期間、巣立ち率:

抱卵日数は不明。育雛期間は約14日。三宅島では、ネズミ駆除を目的としてイタチが導入されたため、巣立ち率は、イタチ導入以前の85%(樋口・小池 1977), 71~78%(樋口 1981)から、約7.3%(高木・樋口 1992)に極端に下がっている。

## 4. 食性と採食行動

早朝と夕方に、主に林縁部で採餌する様子が観察される。落ち葉の下に棲むミズや甲殻類、ムカデ、昆虫類などの他、季節によってはハチジョウグワヤカジイチゴ、タブノキ、オオシマザクラ、エノキ、ハチジョウキブシ、ツルソバナなどの実も食べる。ビデオ撮影により確認できたヒナへの給餌内容は約7割がミズで、その他は、木の実、ムカデ、昆虫類、ゲジなどであった。

## 5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

### ● アカコッコの起源について

アカコッコの起源は、(1)アカハラに近縁で、比較的新しい種であるという説と、(2)中国南部にすむムナグロアカハラに近縁で、遺存種であるとする2つの説があります。形態での比較(下尾筒羽の模様、下雨覆羽の色彩等)から、アカコッコは、アカハラを含むアカハラ上種(アカハラ、シロハラ、マミチャジナイ)と、ムナグロアカハラはカラアカハラと特徴が一致し、両者は別系統で、アカコッコは、アカハラにごく近縁らしいことが示唆されています(梶田ら 1998)。

### ● 島間で異なるさえずり

アカコッコのさえずりは、アカハラによく似ていますが、短く濁っています。三宅島の個体群のさえずりは、図1に示すように2つのシラブルから構成されています。三宅島の

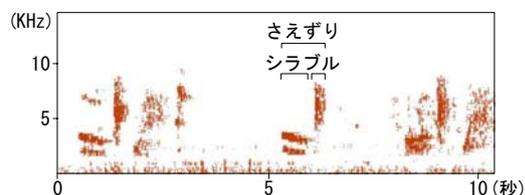


図1. アカコッコ(三宅島)のさえずりのソナグラム。

南約18kmにある御蔵島の個体群のさえずりも三宅島によく似ています。ところが、さらに南に約90km離れた八丈島の個体群では三宅島のものと比べて、さえずりを構成するシラブル数が少なく(図2)、耳で聞いた感じも全然違った印象を受けます。また、さらに南の青ヶ島やトカラ列島の中之島ではシラブル数が多い傾向があります(図2)。

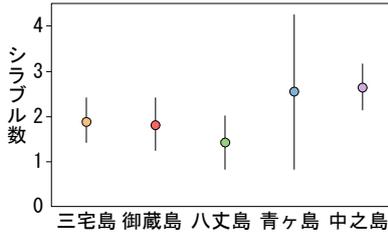


図2. 各島でのさえずりのシラブル数.

● イタチ導入によって下がった繁殖成功率

三宅島では、ネズミの農業被害を防ぐことを目的に1970年代と1980年代の2回にわたってイタチが導入されました。特に、1982年頃の2回目のイタチ導入によって、アカコッコの個体数は大きく減少しました。イタチは木に登ってヒナや卵を食べてしまいます。イタチを放す前に比べてアカコッコの生息密度は約1/3になり、繁殖成功率も約80%から約7%に下がったことが報告されています(高木・樋口 1992)。イタチの放獣は、伊豆諸島では、古くは八丈島、利島、青ヶ島でも行われたため、三宅島と同じような現象が起きたと考えられます。アカコッコの個体群を回復させるためには、イタチ駆除の実施が不可欠です。

● 火山活動による生息地への影響

代表的な生息地である三宅島では、2000年6月から始まった火山活動による降灰や泥流、火山ガスによって森林面積の約6割に影響が出ています。火山活動の初期には、雄山の火口から放出された火山灰によって、標高400m付近より上では火山灰が1m以上も積もり、大部分が裸地化しました。火山ガスの風下にあたることの多い東部では、樹木の枯死が進み、このような場所ではアカコッコは見られなくなっています(写真4)。



写真4. 樹木の枯死が進んだ三宅島東部の森.

2000年の噴火が地表徘徊性の小動物相に与えた影響が調べられていますが、その結果では、「火山灰の被害のある場所」、「火山ガスの被害のある場所」、「両方の被害のある場所」、「両方の被害のない場所」のうち、「両方の被害のない場所」でのみ、ミズが確認されています。

2006年6月に、同様の場所(4地点、各2サンプル)で、鳥類のセンサス調査とあわせて土壤動物を調べたところ、火山灰と火山ガスの「両方の被害がある場所」では、まだ土壤動物は確認されませんでした。「火山灰の被害がある場所」では昆虫だけが確認され、「火山ガスの被害がある場所」では、ミズ、甲虫類、ダンゴムシ・トビムシの仲間が、「両方の被害のない場所」ではミズ、甲虫類、ジムカデの仲間、巻貝などが確認されました。アカコッコは、火山ガ

ス、火山灰の「両方の被害がある場所」では確認されずじまいでした。アカコッコの生息の有無を、ミズとの関係だけから単純に結論づけるのではなく、営巣環境や隠れる場所の有無などの面からも考えていく必要がありますが、少なくとも「火山灰の被害のある場所」ではアカコッコの餌となるミズが見られず、アカコッコの生息に影響が出ているものと思われます。雄山の火口からの火山ガス放出量は最盛期(2000年12月頃)には一日あたり2~5万トンと世界的にも稀な量でしたが、今年になってからは一日あたり1~3千トンと約1/20にまで減ってきています。火山ガスの減少とともに、山麓を中心に徐々に森は回復してきていますので(写真5)、標高の高いところでも、早く以前のような森林や土壌が戻り、アカコッコが姿を見せて欲しいものです。



写真5. 回復しつつある自然。泥流が発生し、火山ガスにより樹木が枯死した地域でも、ハチジョウススキとオオバヤシャブシが入り込んできた。

6. 引用・参考文献

樋口広芳・小池重人. 1977. 三宅島におけるイタチ放獣後の繁殖成功率. 野生生物保護:81-88.  
 樋口広芳. 1981. 鳥類生息調査報告書一島しょにおけるイタチ放獣が野生鳥類に与える影響一. 東京都労働経済局, 東京.  
 樋口広芳. 1992. 鳥類の生態と保護に関する調査報告書. 東京都労働経済局:27-64.  
 梶田学・太田紀子・柿澤亮三. 1998. 伊豆諸島の鳥類の系統分類学的考察(ウグイス及びアカコッコについて). エコツアーズムと島の鳥実施報告書:52.  
 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京.  
 高木昌興・樋口広芳. 1992. 伊豆諸島三宅島におけるアカコッコ *Turdus celanops* の環境嗜好とイタチ放獣の影響. *Strix* 11: 47-57.  
 高野伸二. 1990. フィールドガイド 日本の野鳥. 財団法人 日本野鳥の会, 東京.  
 山階鳥類研究所. 1996. 鳥類標識調査報告書(平成8年度): 17. 我孫子市.

執筆者

山本 裕

日本野鳥の会サンクチュアリ室/  
アカコッコ館 チーフレンジャー

アカコッコを初めて見てもう13年も経ちます。伊豆諸島では誰もが知っている身近な鳥ですが、まだまだ生態の研究も保護上の課題の解決も十分に進んでいないとはいえません。今回、情報を整理するきっかけをいただき、少しでも前進していければ、と思っています。



三宅島のガイド中にて(写真左).

## 会員情報

### バードリサーチ 3年目に突入

バードリサーチは設立から3年目に入りました。昨年度も皆様のご協力のもと、ヒクイナ調査など新しい調査をスタートすることもできましたし、今まで行なってきた調査も継続して発展させることができました。昨年度の活動報告と会計報告をホームページに掲載しましたので、ご覧ください。

[http://www.bird-research.jp/1\\_gaiyo/index\\_2005.html](http://www.bird-research.jp/1_gaiyo/index_2005.html)

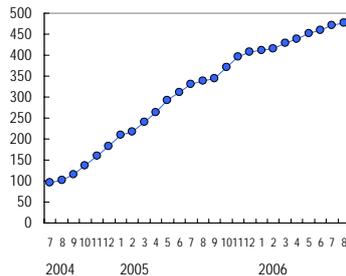


図1. 設立からの会員数の変化.

会員数も476名となり、会員のいない都道府県がなくなり、調査協力者として登録いただいた方を含めると1837名まで増えました。今後も皆様にご協力をいただき、活発に活動していきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

【植田睦之】

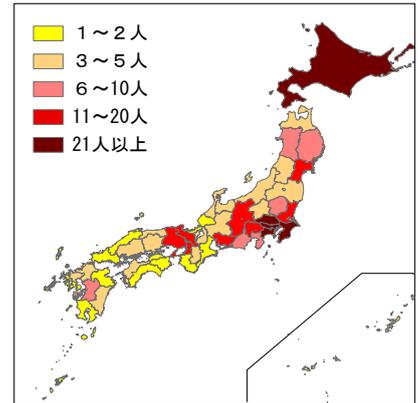


図2. 会員分布. 地域的な偏りは相変わらずですが、ついに全国制覇しました。

## 活動報告

### 野鳥記録用データベース 「フィールドノート」を公開しました！ ～ Excelよりもフィールドノートを～

たくさんたまった野鳥記録の整理は大変です。Excel を使って記録の整理をするのが一般的ですが、いくつかのファイルに保存していた表をくっつけたり、同じような表を何度も作り直したりで、しまいには元のファイルがどれだったか分からなくなって冷や汗をかいたことのある方も多いのではないのでしょうか。

#### 1. フィールドノートの基本機能

そんな皆さんの苦労を軽減するために、バードリサーチが開発したWebで動くソフトウェアがフィールドノートです。そのひとつの特徴は、Webの電子地図を使って簡単に観察場所の位置を登録できることです。また、野鳥記録の登録もスムーズに行えるようにフォームが工夫されています。登録された記録は、バックアップとセキュリティが完備されたサーバに保管されます。パソコンがクラッシュして、データが全てなくなってしまった！という心配はもうありません。

登録した記録は、日時や場所、種名から必要な記録を検索したり、表を作成して Excel に書き出したりすることができますので、どれがもとのファイルだったか心配することなく、目的に合わせたまとめが簡単にできます。

#### 2. グループ調査のまとめ役

そしてExcelではマネできないのが、多人数で記録を共有する機能です。グループで観察をしていると、記録のとりまとめ作業が1人の人に集中しがちですが、フィールドノートでは各自が同じ調査名(※)で入力した記録を共有できるので、入力作業の負担が分散できますし、入力された情報はすぐにWebの画面に反映されますので、他の人の観察状況がリアルタイムでわかる面白さもあります。

※ グループ調査名と参加者を事務局に申請して作成します。グループに所属しない人に記録を見られる心配はありません。

#### 3. 全国的なモニタリングプロジェクト

フィールドノートに入力された記録を使って全国的な野鳥のモニタリングを行おうというプロジェクトも進行中です。詳しくはホームページをご覧ください。

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/index\\_database.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_database.html)

#### 4. フィールドノートのすすめ

フィールドノートはWebサービスにログインするだけで利用することができます。大切なデータの保存と活用のために、ぜひお役立て下さい。検索画面ではペランダバードウォッチの観察記録の検索を行うこともできます。

フィールドノートの開発にはマイクロソフトNPO支援プログラムから助成していただきました。感謝を申し上げます。

バードリサーチニュース 2006年9月号 Vol.3 No.9

2006年 9月 13日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 II-202

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎